関西大学学術リポジトリ
Kansai University Institutional Repository

辞書の編纂と部首分類

著者	乾 善彦
雑誌名	日本語学
巻	17
号	12
ページ	34-41
発行年	1998-10-10
URL	http://hdl.handle.net/10112/1767

文字の歴史と現在

辞書の編纂と部首分類

乾　善彦

1　辞書の分類方法と編纂意図

[1]　辞書の分類

中国の書籍の整理分類には、現在でも『四庫全書』に採用された方法が一般に用いられるが、その『四庫簡明目録』において、辞書の類は小学類に属し、次の三つに別けられる。

訓詁の属―爾雅・釈名など
字書の属―説文・玉篇など
韻書の属―切韻・広韻など

これは漢字の三要素、形・音・義に対応した分類であり、これを見出し語（字）の分類つまり編纂方針から見ると、まず、訓詁の属は、天部・地部などという意義（義）によって分類されており、それは『芸文類聚』や『初学記』といった類書の類と共通するものである。シソーラスや用語辞典のようなものと言ってよかろう。字書の属は、主に部首（形）によって分類され、いわゆる部首引き辞書の体裁をとる。わが国における漢字辞典は、主にこの方法に従う。そして、韻書の属は、平上去入の四声ごとに、それぞれの韻（音）の順序に従って分類される、いわゆる音引きの体裁をとる。これは、通常の国語辞典の方法と言ってよかろう。見出し語を、それぞれのことばに適した音（あるいはつづり）の順に並べることは、どの国語辞典においても、まず、考えられる方法で

ある。このように、辞書の編纂方針は検索方法と深くかかわるものであり、例えば部首分類といったとき、それは字書の編纂方針でもあり、また検索方法でもあり得るのである。

[2] 書くための辞書と読むための辞書

辞書は、おおまかに言って、書くための辞書と読むための辞書とに分けることもできる。その観点からは、厳密にはそう簡単には言えないけれど、訓詁の属や韻書の属は書くための辞書であり、字書の属は読むための辞書とでもなろうか。本邦においても、時代を通じて多くの辞書が編纂されているが、分類方法、検索方法から見るとき、それぞれの分類のもとに置くことができる。

古代	中世から近世
訓詁の属—和名類聚抄	下学集
字書の属—新撰字鏡・類聚名義抄	倭玉篇
韻書の属—色葉字類抄	節用集

ことに中世から近世にかけて、いわゆる通俗辞書として『下学集』『節用集』、そして漢字字書の『倭玉篇』があるが、これらが、印刷という方法によって流布するのは、この三分類のそれぞれが、日常の言語生活、文字生活に必要不可欠であったことを物語ると見てよいであろう。本邦において、韻書の属とは「いろは」引きに相当し、『色葉字類抄』をはじめ『節用集』に至るまで、文章作成のための、書くための辞書であることを基本とする。中国の韻引きとでは、頭音から引くか末尾音で引くか、大きな違いがあるようにも見えるが、これは彼我の音節構造や文芸形式の違いによる。どちらも、文章作成のための辞書であることに変わりない。

[3] 第一次分類と第二次分類

ところで、辞書が一般に辞書と認められるための条件は、どのようなものであろうか。例えば、ある書物を読むために、そこに表れる難語に注を加えるとする。このとき、注された語を取り出し、出現順に配列すると、それはその書物を読むための辞書となりうる。仏典における『一切経音義』などの音義類や、本邦の近世から近代にかけて多く作られた『謡字引』『文選字引』などの字引類は、まさにこのようなものである。しかしこれでは、やはり辞書としての資格に欠けると言わざるを得ない。辞書である限り、ある語に対する注記、語釈などに加え、それらが、ある書の出現順でなく、何らかの方針・意図でもって類聚・配列されていなければならないだろう。三つの分類とはまさにそのようなものである。ただし、

実際に辞書を編纂し、またそれを利用する場合には、分類し集めた語をさらにどのように配列するか、また、分類した各部をさらにどう配列するかという、第二次の分類基準が必要である。第一次の分類方法だけでなく、第二次以下の基準によっても、辞書の性格は規定される。

現行の漢字辞典では、第一次には部首分類を採用するが、その内部では画数順に配列されており、また、部首も画数順に配列されている。つまり、画数が二次分類の基準となっている。ところが、このように部首を画数順に配列するのは、後に述べるように明の梅膺祚『字彙』以降のことであり、比較的新しい方法なのである。それ以前には多様な二次分類の方法が見られる。また、わが国における現行の国語辞典は、頭音の五十音順に分類し、第二次基準も第二音節以降の五十音順となっている。これについても、本邦の国語辞典の系譜に属する『色葉字類抄』や『節用集』では、第二次基準を「いろは」でなく意義分類としている。こういった方法は、それぞれの辞書がどのような目的で編纂されたのかということとかかわるが、それは時代とともに、その要請が異なるところから来るものと思われる。一口に部首分類の漢字辞典といっても、第二次分類以降の多様性は、それぞれの辞書の特徴と大いにかかわっているのである。

2 漢字字書の部首分類

[1] 部首分類の始まり

後漢の許慎『説文解字』（通常略して『説文』と言う）は、部首分類をとる字書のさきがけであり、一・上・示から戌・亥に至る五四〇部を立てる。『説文』における部首とは、文字の成り立ちを説明するための、文字の構成要素のことである。例えば、木部には「木」という字が最初に挙げられ、続いて「木」を構成要素とする多くの文字、木に関係する意味を持つ文字、つまり木偏の文字が収められる。「木」が木部の首（はじめ）、つまり部首なのである。もちろん、これには許慎の字解（文字の解釈）を多分に含んでおり、実際、単字としては用いられないような部首、『大漢語林』（一九九二、大修館書店）によれば「字体整理上の分類」もあるが、これもやはり、意味を持った構成要素であることに変わりない。したがって、部首分類とは、形による分類ではあるが、それは同時に意義に基づく分類でもあることになる。むしろ、分類という意識からは、意義的な側面の方が強いと言えよう。

それは、部首の配列についても言える。『説文』における部首の配列は、形による連想が働いている。しかし、形による連想ですべてがつながっているわけではなく、

背後にある意義によるつながりの方が強いように見える。その意義連想的な構造については、清の段玉裁『説文解字注』の巻末に詳しく説かれるところであり、細部にわたって細心の注意が払われ、一つの世界観を表しているとも言われている（白川静『説文新義』）。

部首に対して偏旁冠脚という語が使われることがある。一つの文字が、二つ以上の構成要素からなる場合、左右の位置関係にあるものの左側を偏（へん）と言い右側を旁（つくり）と言う。上下の関係にある場合、上を冠（かんむり）または頭（かしら）と言い、下を脚（あし）と言う。他に广（まだれ）や厂（がんだれ）などの垂（たれ）、門（もんがまえ）や囗（くにがまえ）などの構（かまえ）、辶（しんにょう）や廴（えんにょう）などの繞（にょう）がある。部首が、漢字の意義的な構成（解字）を説くために考えられた分類であり、そこには意義的な部分と形態的な部分とが、両面としてあるのに対して、いわゆる偏旁冠脚は、そこから文字の結構、つまり純粋に形態面だけを取り出したもの、として位置付けることができそうである。

部首は、偏旁冠脚の名で呼ばれることが多い。ただし、同じ内容を指すこともあるが、こちらは、漢字の形態的な構成（構成要素の位置的な関係）から名付けられたものであり、まさに形による分類である。したがって、厳密には一致するわけではない。例えば、木部には木偏（構成要素が横に並ぶ）の文字も平木（構成要素が縦に並ぶ）の文字も含まれるが、偏旁名としては別に立てられることになる。このような類は、山部の山偏と山冠、あるいは心部の立心偏と下心、火部の火偏と烈火（連火）など数多い。また、逆に匚（かくしがまえ）と匸（はこがまえ）、匕（き）とヒ（ひ）のように、本来二つの部首が、現在では、辞書によってその区別をしないものもある。このあたりにも、部首分類における形態と意義との二面性がうかがえるのである。

[2] 部首分類の展開

梁の顧野王『玉篇』も、『説文』を受けて五四二部を立てるが、内容には幾つか出入りがある（十部減十二部増）。また部首の配列も、一・上・示から始まり戌・亥に終わるところは同じであるが、内部では大きく異なり、例えば人部以下人に関する部が並ぶといった、訓詁の属や類書などに見られる、意義分類的な配列が認められる。

『玉篇』は、注が詳しく、用例が数多く引かれており、その点で内容的にも類書に近いと言える。本邦において、『切韻』などの韻書よりも部首引きである『玉篇』がよ

く利用されたことについて、形による部首引きの方が、音による引き方よりも利用しやすかったからであると考える向きもあるが、『玉篇』が重宝されたのは、むしろその類書的な性格ゆえであり、意義的な面を見逃してはならない。同じ部首分類でも、『説文』と『玉篇』とでは、やはり『玉篇』がよく利用されたのである。

その後、部首に整理が加えられ、中国においても本邦においても、部首の数は減少していく。唐の張参ほか『五経文字』では、一六〇部を、字形連想的に配列している。これは本書が正確な字体を知ることを目的としたためと思われる。同じく字体を問題としながらも、遼の行均『龍龕手鑑』では、二四二部を部首の韻によって配列する。字体の字書を四声によって分類するのには、唐の顔元孫『干禄字書』の先例があるが、部首の配列においても、部首の読み方さえ分かれば、これは部首を検索するのに最も簡便な方法であろう。金の韓孝彦『四聲篇海』も四四四部を韻によって配列する。ただし、注目すべきは巻末に付された部首の一覧であり、これは部首を画数によって配列し直したものである。検索の便も考えてこれを付録としたものと思われるが、これにより部首を画数順に配列することが行われ、明の梅膺祚『字彙』に至って、二一四部を画数順に配列することになる。現在、漢字辞典に広く採用されているのは、『字彙』の流れを受けた『康　字典』の二一四部（『字彙』やそれに続く『正字通』とは若干の相違がある）をもとにして、さまざまな工夫がなされたものであるが、部首の配列ははぼ『字彙』の画数順という方針を踏襲する。

[3] 本邦における部首配列

本邦に目を転じてみると、九世紀末昌住の『新撰字鏡』は、約一六〇部を意義分類的に配列する。これについては阪倉篤義「辞書と分類―新撰字鏡について」が類書の影響を指摘している。平安時代末の『類聚名義抄』の部首配列については、酒井憲二「類聚名義抄の字順と部首配列」に詳しい。そこでは方針として部首の形による配列が随所に認められるが、根幹にあるのは『玉篇』などに採用された意義の連想による配列である。ただし、各部内の文字の配列は、おおむね字体の類似によっており、形による配列を採用したと見てよい。そしてそれは、『字鏡』類へと受け継がれる。

『字鏡』類あるいは『倭玉篇』類として一括される辞書においては、それぞれの伝本によってその配列は大きく異なる。その中には、『字鏡集』（一二〜一三世紀）や『玉篇要略集』（一四世紀）のように、部首の目録に、は

っきりと意義分類をうたうものがある。例えば、天文本『字鏡集』では、一九二部を、天象・地儀・植物・動物・動物・人倫・人体・人事・飲食・雑物・光彩・方角・員数・辞字の十四部に分類する。これは、イロハ順の音引き国語辞典である『色葉字類抄』（一二世紀）の各部内での分類をおそったものである。近世以前の『倭玉篇』類は、以下に示すように、おおむね部首を意義分類する。

一類　大永四年写玉篇要略集　意義分類
二類　弘治二年写和玉篇　意義分類
　篇目次第　意義分類
三類　落葉集小玉篇　意義分類
　音訓篇立　意義分類
四類　享禄五年写玉篇略　意義分類
五類　夢梅本和玉篇　意義分類＋玉篇
六類　慶長年中古活字本　龍龕手鑑
七類　類字韻　玉篇
八類　慶長十五年刊本　玉篇

（川瀬一馬『古字書の研究』の分類による）

これは、書名に『玉篇』の名を含みながらも、『字鏡』類を受けて編まれたものであるからであり、これに比べて、近世以降は、まさに『玉篇』（宋本）の影響で、部首分類もそれに従うようになる。そして、一七世紀になると『画引和玉篇』のように画数順の目録を付すものが現れ、毛利貞齋の『大広益会玉篇大全』に至ってようやく、『字彙』の部首分類に従うようになる。以後、近代の漢字辞典は中国同様、おおむね『康熙字典』の二一四部に従うようになる。

このように、本邦の漢字字書では、中国でのそれに比べると、比較的長く部首を意義分類する方法がとられていた。これは、『色葉字類抄』が、各部をさらに意義分類する、書くための辞書であることと同じ方向で考えることができそうである。『字鏡』類および『倭玉篇』類が、単に漢字の訓を知るためのものではなく、それが漢詩作成のための韻書の役割も果たしたのであろうことは、例えば『字鏡集』には各字に四声と分韻とが記入されているし、『倭玉篇』類には平仄による分類を施すものも現れることからうかがわれる。したがって、これらが、近世になってまったく形による編纂方針に切り替わるとき、辞書の性格にも変化が生じる。それは、『節用集』が和漢連句作成のために成立しながらも、漢字の訓によって語の意味が知れるというように、国語辞典の一面を備え、通俗辞書として広く流布することと揆を一にする。

近代の国語辞典や漢字辞典は、書くためと読むための両面性を備えている。『節用集』が国語辞典へ展開するのと同様、『倭玉篇』類が漢字辞典へと発展する、その一つの要因を、ここに認めることができるのである。

[4] 現代の部首分類

部首の整理は、基本的には字書の編纂方針にかかわるものである。しかして、部首を韻の順や画数順に配列するということは、部首分類の検索方法の面での配慮である。以上に見てきたように、部首分類やその配列は、時代を通じて、編纂方針よりも検索方法に、意義面重視よりも形態面重視の分類へと傾いてゆく。もちろん、現行の漢字辞典においても、例えば「聞」が門部でなく耳部に入っている（門部からも検索可能にはなっている）ように、意義面でのなごりがあったり、検索のためには音訓索引や総画索引などが付載されるなど、部首分類自体が純粋に検索方針、形態重視になっているわけではない。しかしながら、基本的には『康　字典』の二一四部に従いながらも、日中ともに形に傾いた工夫がなされているのである。

例えば、『大漢語林』では、部首の新設（灬部、単・巣・営・厳など）、部首の合併（匚〈はこがまえ〉と匸〈かくしがまえ〉、夂〈ふゆがしら〉夊〈すいにょう〉など）、部首の分離（刀〈かたな〉と刂〈りっとう〉、犬〈いぬ〉と犭〈けものへん〉など）が、凡例にうたわれている。また、中国でも、『辞海』は、版によって若干の出入りはあるが、簡体字の形に合わせて部首を手直しし、二五〇部に分ける。また、最近の『漢語大詞典』と『漢語大字典』では、それを統合して二〇〇部とする。

これらはすべて、基本的には現行の形（字体）を重視した改変であると言える。つまり、このような部首の整理は、漢字字体の変遷ともあいまって、部首分類の意義面重視から形態面重視への移行をうかがわせるのである。その点で、近代の漢字辞典の部首分類は、『説文』や『玉篇』のそれとは異質なのであり、また、本邦の漢字字書のそれとも異質なのである。

3　部首の名称の変化から

本邦における部首の名称も、意義によるものから形によるものへと変化して行く傾向を見てとれる。部首名は、古く『新撰字鏡』に三水や立心、連火などの名が見え、まさに形状から呼び方の行われていたことがわかるが、多くは中国での字音をそのまま音読みしていたようであ

る。部首名を集めたものとしては、中世の『運歩色葉集』『落葉集』が知られるが、近世にはいると、幼学書とか往来物とか呼ばれる初学のための教科書や、節用集、重宝記の類に、偏旁冠脚が集められた「偏尽し」などと呼ばれる付録が付けられ、当時の漢字の学習に偏旁冠脚がかかわっていた様子がうかがわれる。

それらを通観すると、大まかな傾向として音読みから訓読みへ、本来の部首名から、形状の特徴をとらえた呼称へと移り変っているようである。一つ一つにそれぞれ考証が必要であるが、例えば、

土（どへん→つちへん）
日（にちへん→ひへん）
亠（とうかぶり→けいさんかんむり→なべぶた）
王（ぎょくへん→たまへん→おうへん）

などは、その顕著な例である（明治書院『漢字百科大事典』付録　部首の変遷　参照）。

これは、一つには漢字の字体を覚えるための便宜から来るものと思われるが、ここにも部首を漢字の形の面からとらえようとした態度が見てとれる。本来、漢字の成り立ちを説明するものであった部首と、字体の構成を説明するための偏旁冠脚とが、限りなく同義語に近付いてゆく状況が、ここにも認められるのである。

参考文献

岡田希雄（一九四四）『類聚名義抄の研究』
川瀬一馬（一九五五）『古辞書の研究』
阪倉篤義（一九五〇）「辞書と分類――新撰字鏡について」（『国語国文』一九巻二号）
山田忠雄（一九五九）「漢和辞典の成立」（『国語学』三九）
酒井憲二（一九六七）「類聚名義抄の字順と部首排列」（『本邦辞書史論叢』）
築島裕「古辞書における意義分類の基準」（『品詞別日本文法講座品詞分類』）
福田益和（一九七一）「古辞書における部首排列の基準」（長崎大学教養部紀要一二）
乾善彦（一九九四）「日本における部首引き漢字辞典の部首配列をめぐって」（『東方学術論壇上集』）
白条洲（一九三三）「略談字典部首的流変」（『国語周刊』一八期）
施安昌（一九八一）「唐人対〈説文解字〉部首的改革」（故旧博物院刊）
頼惟勤（一九九六）『中国古典を読むために』（大修館書店）
西崎亨編（一九九五）『日本古辞書を学ぶ人のために』（世界思想社）

＊本稿の記述は、参考文献に挙げた拙稿と大幅に重なる部分のあることをお断りしておく。

（いぬい・よしひこ　大阪女子大学教授）